J.LEAGUE
J STATS REPORT 2022（概要）

公益社団法人日本プロサッカーリーグ

2023年1月

はじめに

ファン・サポーターやサッカーに関係する多くの方々にとって
データがより身近に、親しみやすいものになるように

またデータによる新しいサッカーの楽しみ方の提供や
日本サッカーの強化・育成・普及への貢献を目指して創刊したのが
この『J STATS REPORT』です。

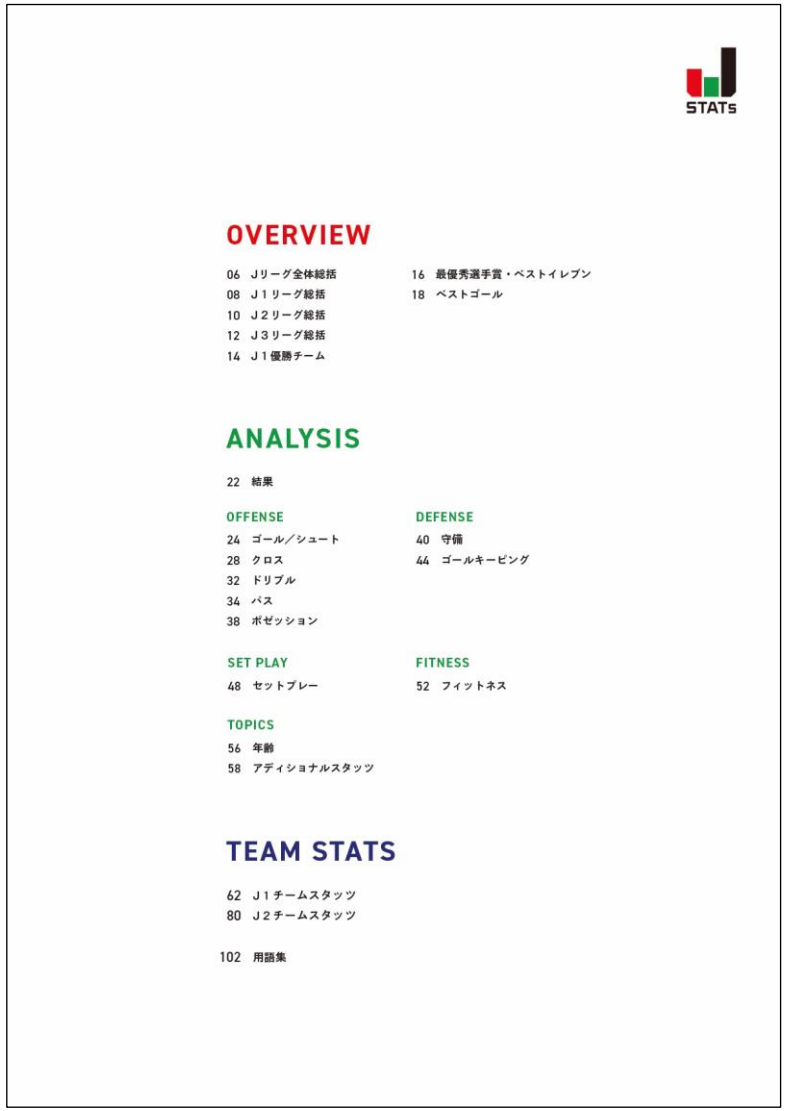
前半では2022シーズンのＪリーグを総括し
後半では各局面やチームごとの分析結果をまとめました。

J STATS REPORTをきっかけとして
自由にフットボール談義をするためにご活用ください。

全体構成

Ｊ STATS REPORTは、“OVERVIEW”・”ANALYSIS“・”TEAM STATS”の三部構成となっています。本概要では、本文の一部を抜粋・要約して紹介しています。

- OVERVIEW：各リーグ総括・Ｊ１優勝チーム・最優秀選手賞・ベストイレブン・ベストゴールについて紹介
- ANALYSIS：Ｊ１の攻撃・守備・セットプレー・フィットネスに関するスタッツを紹介
- TEAM STATS：Ｊ１の18クラブとＪ２の22クラブのチームスタッツを紹介



STATs

OVERVIEW

06 Jリーグ全体総括
08 J１リーグ総括
10 J２リーグ総括
12 J３リーグ総括
14 J１優勝チーム
16 最優秀選手賞・ベストイレブン
18 ベストゴール

ANALYSIS

22 結果

OFFENSE
24 ゴール／シュート
28 クロス
32 ドリブル
34 パス
38 ポゼッション

DEFENSE
40 守備
44 ゴールキーピング

SET PLAY
48 セットプレー

FITNESS
52 フィットネス

TOPICS
56 年齢
58 アディショナルスタッツ

TEAM STATS

62 J１チームスタッツ
80 J２チームスタッツ

102 用語集

OVERVIEW（p.6 - p.19）

“OVERVIEW” では、各リーグ総括・Ｊ１優勝チーム・最優秀選手賞・ベストイレブン・ベストゴールについて、スタッツを交えながら紹介しています。

【Ｊ１リーグ総括】

2022シーズンのＪ１は、2019シーズン以来3シーズンぶりに最終節まで優勝争いがもつれ、横浜Ｆ・マリノスが勝点68で3シーズンぶり5度目の優勝を成し遂げた。

リーグ全体で見ると、引き分け率が31.7％で歴代最高となった。特に2月と3月の引き分け率が高く、勝点差が広がらない序盤戦が繰り広げられた。また、スコアレスドローは歴代最多の36試合、比率も11.8％となった。1試合平均得点数は1.26で、史上最も低かった2021シーズンの1.21に次ぐ低さとなっている。

【Ｊ２リーグ総括】

今シーズンのＪ２では、前半16分から30分の間と、後半アディショナルタイムでの得点が例年に比べて増加しており、前半の中盤戦や試合終了間際の攻防が激しさを増したシーズンとなった。

全体の得点数は平均的だったが、アシスト数はここ5シーズンで最多の790となっており、連係からのゴールが多く生まれたシーズンとなった。特にクロスでのアシスト数は283を記録しており、こちらも最多となっている。この数字はＪ１と比較しても高い結果となっており、クロスからの得点が増えている傾向は、今シーズンのＪ２における一つの特徴だったといえる。

【Ｊ３リーグ総括】

今シーズンのＪ３は、参入1年目のいわきＦＣが勝点76を獲得し、2位に勝点差9をつけ優勝を果たした。1試合平均勝点は2.24で、これはＪ３歴代2位の数字である。1試合平均ゴール数2.12もＪ３歴代3位と、圧倒的な攻撃力でリーグを席巻した。

また、今シーズンＪ３で特徴的だったデータとしてゴールキックが挙げられる。GKが短いパスを蹴る回数はＪリーグ全体で増加傾向となっているが、今シーズンのＪ３はそれが顕著で、ゴールキックの到達地点がディフェンシブサードである割合は40.8％（2019シーズンから2021シーズンまではいずれも20%台）となった。

ANALYSIS　－OFFENSE（p.24 - p.39）－

”ANALYSIS” では、Ｊ１の攻撃・守備・セットプレー・フィットネスに関するスタッツを紹介しています。攻撃パートをさらに細分化し、「ゴール／シュート」・「クロス」・「ドリブル」・「パス」・「ポゼッション」についてそれぞれ分析を行っています。

ANALYSIS

OFFENSE

GOAL / SHOOT ゴール／シュート

● シーズン別の得点数とホーム／アウェイ別得点数

シーズン	得点数	ホームチーム得点数	アウェイチーム得点数
2005	873	469	404
2006	976	532	444
2007	867	474	393
2008	783	433	350
2009	791	437	354
2010	813	436	377
2011	869	474	395
2012	855	460	395
2013	879	479	400
2014	774	413	361
2015	820	432	388
2016	805	413	392
2017	793	419	374
2018	813	434	379
2019	797	418	379
2020	866	445	421
2021*	920	494	426
2022	771	424	347

*2021シーズンは380試合

▶2022シーズンに生まれた得点数は771。2005シーズン以降で最も少なかった2014シーズンの774をわずかに下回り最少の記録となった。1試合平均得点数では、380試合だった2021シーズンの2.42に次いで2番目に少ない2.52となっている。ホーム／アウェイ別の得点数を見ると、アウェイチームの得点数が2005シーズン以降で最も少ない347となっている。また2022シーズンの時間帯別得点数では、前半の得点が39.7%、後半の得点が60.3%となっており、後半でも特に終盤にあたる76分以降に多くの得点が生まれていることがわかる。

14

途中出場選手が決めたゴールが最も多かったのはセレッソ大阪の14。ジェアン パトリッキが5、加藤 陸次樹が3、上門 知樹が2、他4選手が1。

● 前後半別の得点数

	得点	割合
前半	306	39.7%
後半	465	60.3%

● 時間帯別の得点数

	得点	割合
0-15分	91	11.8%
16-30分	104	13.5%
31-45分	111	14.4%
46-60分	143	18.5%
61-75分	133	17.3%
76-90分	189	24.5%

24 J.LEAGUE

【ゴール／シュート】

- 2022シーズンに生まれた得点数は771。2005シーズン以降で最少となった。
- 時間帯別得点数では、前半の得点が39.7%、後半の得点が60.3%となっており、後半でも特に終盤にあたる76分以降に多くの得点が生まれた。
- 全シュートに対するシュートパターン別の割合を見ると、ショートパスからが27.0%、セットプレーからが26.7%ときっ抗している。

【クロス】

- クロスからのゴール数は横浜Ｆ・マリノスの29が最多で、総得点70に対して41.4％を占めている。
- サンフレッチェ広島の藤井 智也がリーグ最多となる162本のクロスを供給。
- クロスから最も多くアシストを記録したのは、清水エスパルスの山原 怜音。右足で3アシスト、左足で4アシストを記録している。

【ドリブル】

- ドリブル数が最も多かったチームはサンフレッチェ広島で451回であった。チーム内トップは藤井 智也の137回で、リーグでも最多となった。
- 20m以上ボールを持ち運んだ回数を示すキャリー数では、浦和レッズが最多の369回を記録。選手別でも浦和レッズのアレクサンダー ショルツが65回で最多。

【パス】

- パス数が最多であったのは横浜Ｆ・マリノス。成功率も81.5％と2番目の高さであった。成功率が最高だったのは83.3%の川崎フロンターレ。
- スルーパス数、ラストパス数ともに最多を記録したのは、柏レイソルのマテウス サヴィオ。マテウス サヴィオのラストパスから小屋松 知哉が12本、細谷 真大が9本のシュートを打っている。

【ポゼッション】

- ボール保持率が最も高かったのは横浜Ｆ・マリノスで57.9％。ボール保持率が50％を超えた試合は32試合を記録した。

ANALYSIS　－DEFENSE・ SET PLAY・ FITNESS（p.40 - p.55）－

守備パート以降では、「守備」・「ゴールキーピング」・「セットプレー」・「フィットネス」について分析を行っています。最後に、トピックスとして年齢に関する分析結果や2022シーズンの特徴を表すスタッツも紹介しています。

ANALYSIS

SET PLAY　セットプレー

● シーズン別のセットプレー得点数と全得点に占める割合　※2021シーズンのみ380試合。その他のシーズンは306試合。

2018	2019	2020	2021	2022
273	228	247	308	240
33.6%	28.6%	28.5%	33.4%	31.1%

● シーズン別のセットプレーからの得点内訳

シーズン	合計	PK	FK	CK	スローイン	その他
2018	273	56	68	97	33	19
2019	228	50	64	78	28	8
2020	247	42	66	104	29	6
2021	308	57	79	129	36	7
2022	240	41	55	93	40	11

※「その他」にはゴールキックとPKのこぼれ球を含む
※ PKは直接、それ以外はプレー開始から5プレー以内の得点が対象

▸ 近年、セットプレーからの得点数は全体得点数の30%前後となっており、2022シーズンは31.1%であった。内訳を見ると、例年に比べてFKからの得点が少なく、スローインからの得点が多かったといえる。

また、チーム別にCKとFKからの得点数と失点数を比較すると、ガンバ大阪とサンフレッチェ広島はどちらも得失点差がプラスになっている一方で、柏レイソルと京都サンガF.C.はどちらも得失点差がマイナスとなった。

CKとFK両方の得失点差を合計すると、川崎フロンターレとサンフレッチェ広島がプラス7となっており、セットプレーを強みにしていたことがわかる。特に川崎フロンターレはCKから14得点を奪っており、2016シーズン以降では2017シーズンにセレッソ大阪が記録した18得点に次ぐ数字となった。

● チーム別のCKとFKからの得失点数

チーム	CK			FK		
	得点	失点	得失点	得点	失点	得失点
札幌	7	3	4	2	5	-3
鹿島	5	7	-2	3	3	0
浦和	6	6	0	6	4	2
柏	1	4	-3	0	7	-7
FC東京	3	4	-1	3	3	0
川崎F	14	4	10	1	4	-3
横浜FM	6	8	-2	6	1	5
湘南	5	8	-3	1	0	1
清水	5	6	-1	2	2	0
磐田	4	4	0	2	6	-4
名古屋	4	5	-1	4	4	0
京都	4	8	-4	2	4	-2
G大阪	6	2	4	2	1	1
C大阪	6	6	0	5	2	3
神戸	4	7	-3	4	4	0
広島	5	3	2	7	2	5
福岡	3	2	1	1	3	-2
鳥栖	5	6	-1	4	0	4

※プレー開始から5プレー以内の得点が対象

● 川崎FのCK得点シーン

● CKのインスイング率とアウトスイング率

左CK	右CK
インスイング率	インスイング率
65.9%（シュート率20.5%）	37.8%（シュート率25.9%）
アウトスイング率	アウトスイング率
34.1%（シュート率34.2%）	62.2%（シュート率33.6%）

▸ CKからのクロスを左右別および軌道別に見ると、左CKではインスイング率、右CKではアウトスイング率が60%を超える結果となっており、右足でのキックが多いことがわかる。CKからのシュート到達率を比較すると、左右にかかわらずアウトスイングの方が高く、特に左CKではアウトスイングのシュート到達率がインスイングの1.5倍以上の数値となっている。

48　J.LEAGUE

【守備】

- サンフレッチェ広島とサガン鳥栖は、今シーズンからそれぞれミヒャエルスキッベ、川井 健太を新たに監督として迎え、1試合平均のハイプレス回数とタックルラインのどちらも昨シーズンより高くなっている。
- タックル数1位は、名古屋グランパスの稲垣 祥で105回。2年連続トップとなった。タックルによるボール奪取率も71.4%と非常に高い。
- 自陣での空中戦では、サンフレッチェ広島の荒木 隼人が最多の155回を記録し、勝率でも69.7%という高い数値を記録。

【ゴールキーピング】

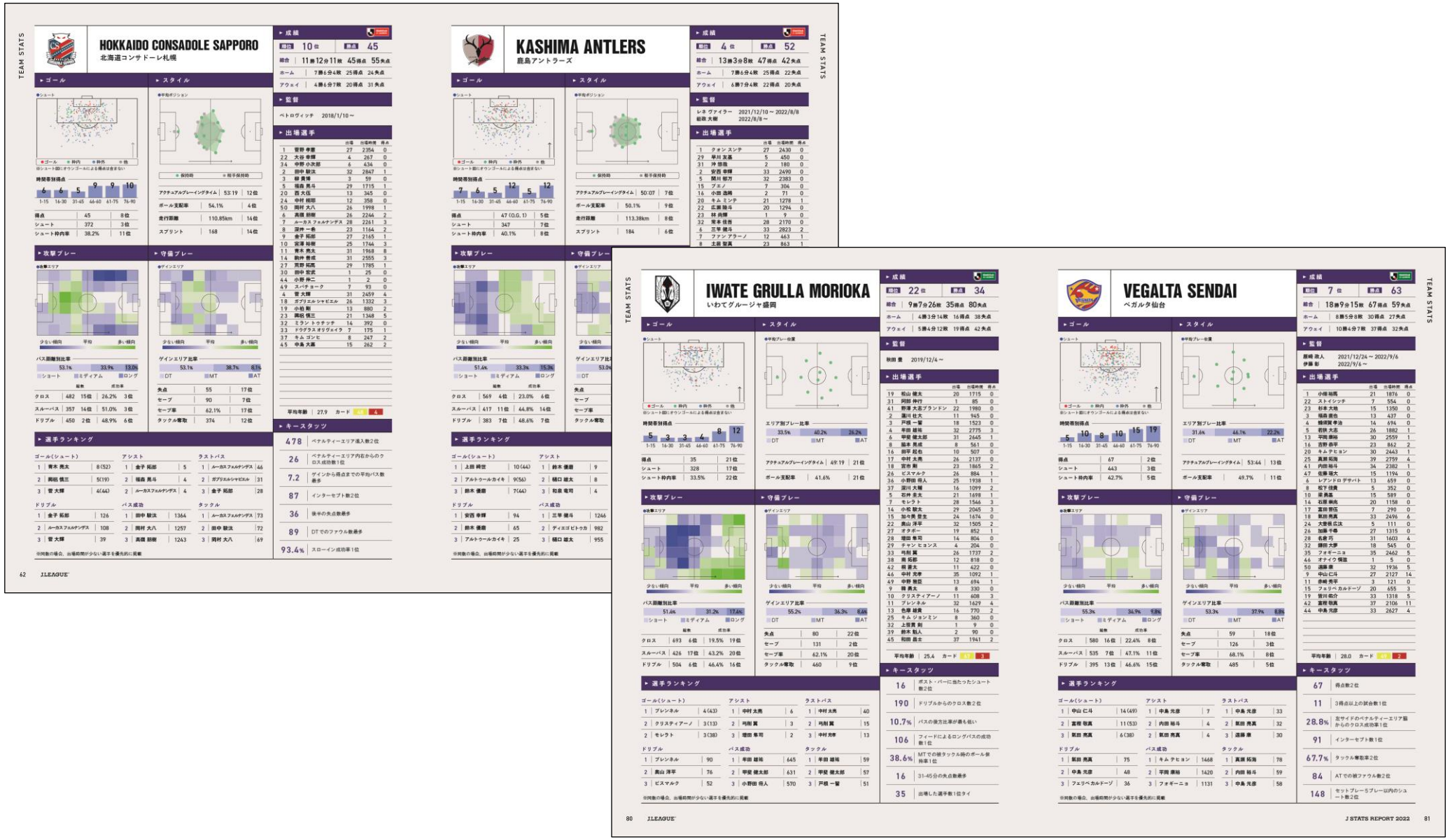
- 失点数は横浜F・マリノスと名古屋グランパスが最少の35。クリーンシート（無失点試合）数はＦＣ東京が14試合と最も多かった。
- 75%以上の高いセーブ率を記録したのはガンバ大阪の東口 順昭と京都サンガF.C.の上福元 直人の2人であった。
- ゴールキックの傾向を見ると、ディフェンシブサードへのゴールキック比率が2018シーズンは19.8%だったのに対し、2022シーズンは44.3%と増大している。

【セットプレー】

- 近年、セットプレーからの得点数は全体得点数の30%前後となっており、2022シーズンは31.1%であった。
- CKとFK両方の得失点差を合計すると、川崎フロンターレとサンフレッチェ広島がプラス7となっており、セットプレーを強みにしていたことがわかる。

【フィットネス】

- 1試合平均のチーム走行距離およびスプリント回数の両方で、サガン鳥栖が最高値を記録した。
- 総走行距離では、名古屋グランパスの稲垣 祥が398.6kmで1位、ヴィッセル神戸の酒井 高徳が369.9kmで2位となり、昨シーズンと全く同じ順位となった。
- 総スプリント回数では、京都サンガF.C.の白井 康介が897回で1位。

TEAM STATS（p.62 - p.101）

“TEAM STATS”では、Ｊ１の18クラブとＪ２の22クラブについて、ゴール・スタイル・攻撃プレー・守備プレーに関するスタッツや、出場選手一覧、選手ランキング、チームの特徴を表すキースタッツ等を紹介しています。